

政治漫画の日米比較

——九二年六月の政治漫画の内容分析——

茨木正治

第一章 はじめに

第二章 内容分析

- (1) 分析の方法
- (2) 分析と考察

① テーマ

② シンボルの分析

③ 活字情報との関連

第三章 おわりに

第一章 はじめに

政治現象は多種多様な様相をもつと同時に共通の像を描き出す。この複雑な政治現象をとらえるためには、視座の中心に自己を置くことが必要になる。ところが、人間それ自体も政治的現実のなかにいるために、いかにして自分の位置を確認するかは容易ならざる問題になる。たとえば、ふつう政治を「みる」立場にいる民衆であっても、自分を

中心とした小規模な人間関係では政治を「する」ことになる。また、国家や地球規模の政治においても全く政治と関わらない傍観者ではいられず、何らかの形で政治との関わりをもっている。

このような混沌とした政治「認識」の状況において、比較の視座が政治現象の把握の一助になると思われる。社会科学における比較の重要性は、観察者としての自己をいかに位置づけるかという点で客観性の維持をめざす努力の産物であった。自己(自国)のもつ問題をそれと似た形の他者(他国)の問題と対比させることによって、あるいは他者(他国)が描きだす自己(自国)像をみることによって、自己(自国)を確認していくことはパーソナリティや文化の違いを無視しても余りあるものであった。

比較の視座を「政治漫画」に用いることは二つの面での効果をもつ。一つには「政治漫画」が描く対象の比較を通じて多角的な政治的現実を描き出すことがある。もう一つは「政治漫画」自体の対象化がある。政治的現実の描き方を比較検討することによって、文化的背景を捨象してもなおかつ残る特性を引き出すことが可能になれば、それは「政治漫画」のアイデンティティの問題につながる。

ところで、人間がある政治現象の局外者であると同時に別の次元の政治現象の局内者であることは、情報の受け手と送り手との双方の役割を担っていることでもある。言い換えればコミュニケーションの受け手と送り手の両方の働きをもちうるということになる。マス・コミュニケーションの受け手研究は、効果研究に代表されるように心理学の知見を得た定量的な実証研究が従来から主流であった。他方、マス・メディアの組織・構造、社会や政治との関係を社会学的に分析する送り手研究は、定性的・記述的な分析を特徴としているために数量化になじまない部分が多く、「実証的」でないとみなされ、受け手研究にくらべて関心が薄かった⁽¹⁾。しかしながら、メッセージ内容を科学的に分析することを目的とした「内容分析」研究⁽²⁾は、本来は送り手研究の範疇にはいるものであるが、受容者分析や効果分析のような受け手研究の調査資料としても用いられているので、送り手研究と受け手研究との双方を繋ぐ分析手法と

して考えられ得る。

「内容分析」研究は、もっぱら新聞記事を素材にしてそこから政治的あるいは社会的諸問題を考察するものが多い。視覚メディアに関するものは、テレビの内容分析がその代表的なものである。³⁾ところで、「客観報道」を旗印にする新聞報道のなかにあって、新聞社・漫画家の送り手の価値体系を表現するだけでなく、受け手である読者のそれをも暗黙のうちに示している「政治漫画」は、新聞記事やコラム・社説といった新聞内の活字情報が捉えきれない情報を内包している。この点で「政治漫画」は新聞内で特異な存在であり、活字・視覚の両方のメディアの相互作用をその中に見いだすことができる。

本稿では、視覚メディアとしての「政治漫画」の特性を明らかにするために、一九九二年六月の日本とアメリカ合衆国の新聞に掲載された「政治漫画」の比較検討をおこなう。合衆国の「政治漫画」は建国以来の伝統を持ち、常に一定の水準が保たれていて「真摯な討論と勇敢な意見表明」⁴⁾を凝集する存在とみなされている。このような合衆国の「政治漫画」と日本の「政治漫画」とを「政治漫画」の形態に着目した分析から得られた知見をもとに検討を加え、「政治漫画」そのものの特性を明らかにし、描かれる対象としての政治現象や状況を再構成する。

第二章 内容分析

(1) 分析方法

一九九二年六月一日から同年六月三〇日までに「ワシントン・ポスト」、「朝日新聞」、「毎日新聞」、「読売新聞」の四紙に掲載された「政治漫画」計八九枚を用いた。なお、日本の「三紙」（以下同じ）は東京最終版である縮刷版を、「ワシントン・ポスト」（以下「ポスト」、「朝日」、「毎日」、「読売」と略）は実紙をそれぞれ使用した。これらの新聞の「政治漫画」の内容分析をするにあたって、以下の視点を設定して分析・考察を行なった。①「政治漫画」が扱って

いるテーマ、②テーマを象徴化している事物・人物とそれらの相互作用の連関、③「政治漫画」内・外の文字と、「政治漫画」の画像との関連、④①から③までをふまえた上での「政治漫画」の修辞技法による分析。これら①から④までの視点をもとにして「三紙」と「ポスト」との「政治漫画」の技法に関する比較を行なった。

①テーマの分析

「政治漫画」が扱う題材は何かを一枚ずつ読み取り、一枚につき一項目を原則にして選び出し、九項目（「政治」、「外交」、「経済」、「労働」、「世界」、「文化」、「社会」、「スポーツ」、「その他」）に分類した。また、一項目に選びきれない「政治漫画」はテーマの重複があるとみなし、重複した項目の頻度を数えた。また、この九項目の中で頻度の高い項目にはさらに細目を設けて詳細な検討をくわえた。

②「シンボル」の分析

①で選び出したテーマを象徴的に表している（「シンボル化」している）事柄を人物と事物に分けて「政治漫画」ごとに引き出し比較した。人物については、「政治漫画」一枚ごとに登場する「認知できる」人物の頻度数をまとめた。さらに、「シンボル化」された事物・人物が相互にどのように関わり合いをもつて「政治漫画」を構成しているかをみるために、「政治漫画」を被験者に見せた後、その内容を主述関係がはっきりした一文にまとめさせた。その結果をもとにして、「政治漫画」の「主体」と「客体」に含まれる事物・人物を明らかにした。そこから、「述部」の主要構成要因である「述語動詞」に着目して、いくつかのカテゴリーにその「述語動詞」を分け、その頻度を調べた。

また、「シンボル化された事物・人物」と表現技巧との関連をみるために、(a)線、明暗、形態（色調や雰囲気を作る）(b)身体の誇張(c)物の配置、構成、(d)人物・事物の相対的大きさ、(e)対象となるものの動き、の五つの項目を設定し、それらが個々の「政治漫画」にどのように用いられているかを一枚ごとに一項目を選び出すこと⁽⁵⁾によって明らかにしようとした。

③文字情報との関連

まず、「政治漫画」内部にある文字情報（「見出し」、「フキ出し」、「説明語句」と画像との関連をみる。これらの「政治漫画内」文字情報が画像に対して、(a)なければ内容がつかめない（「優位」）、(b)なくとも遜色がない（「劣位」）、(c) (a)、(b)いずれでもない（「中立」）という三段階の尺度を用いて評定した。また、「政治漫画内情報」が画像に与える影響について、文字情報が α 与えられた場面を「解説」している、 β 画像内の意見を「説明」している、 γ 描かれた人物や場面について内在する事柄を「暴露」している、の三項目から一項目を評定者に選ばせた。

次に、「政治漫画」外の文字情報として「社説」と、テーマの根拠になった「記事」をあげ、それらの政治的態度と「政治漫画」のテーマそのものへの立場とをそれぞれ「好意」、「中立」、「非好意」の三段階尺度で評定し比較した。

(2)分析と考察

①テーマの分析

(表1)のように、日本の「政治漫画」はどれも「政治」(国内)をテーマとして扱っている。「三紙」の総数六九枚中、六八パーセントをしめている。「朝日」と「毎日」にその傾向は著しい（「朝日」七五・七パーセント、「毎日」八七・五パーセントの高率である）。さらに、「世界」(国際政治)（「三紙」全体で二四・六パーセント）を加えると、日本の「政治漫画」の九割が「政治」現象をテーマとしていることになる。このように、「三紙」が「政治」と「世界」を中心とする文字通りの「政治」漫画であるのは、「朝日」（九二年二月まで）や「読売」に他の領域を扱う定期的な一コマ漫画が存在していたことが理由として考えられる。

「政治」と他領域（敢えて「社会」と呼ぶ）との分業が明確になされている「三紙」に対して、「ポスト」では「(国内)政治」をテーマとする「政治漫画」の数は比較的少い（六五パーセント）。「社会」をテーマとした「社会風刺画」

の性格を帯びていることがわかる。

「政治」の項目をもう少し細かくみると、「三紙」は「議会」(国会運営)を扱ったものが四七枚中二九枚(六一パーセント)ある(表2)。この割合は「朝日」、「毎日」、「読売」ともに差違はない。具体的には、九二年六月一日に第一二三国会で可決成立したPKO法をめぐる衆・参両議院内の政治状況を描写したものが二九枚のなかの九割以上を占めており、一三国会がこの法案成立のための国会であったことを「三紙」の「政治漫画」が如実に語っている。また、このような時事的なテーマの多さが「三紙」の特徴である。

「ポスト」の場合には、「選挙」(大統領選挙)が「政治」をテーマとした「政治漫画」一三枚の約半数に及んでいる。後述するように、この項目についてはペロー候補という、人物の頻度が高く、人間個人の性格や特徴がテーマ設定の大きな要素であることを示している。また、「ポスト」の「政治漫画」が「選挙」以外に半数近くをテーマとして登場させたことからみても、「三紙」のPKOへの集中は特筆すべきものであることがわかる。すなわち「三紙」のように、ある一つの出来事にテーマを集中させる「一点集中」型の「政治漫画」は「高級紙」と「大衆紙」の相矛盾する性格をもたざるをえない。それゆえ、「政治漫画」の「集中化」¹⁰⁾が行なわれたと考えられる。

テーマの重複については、「三紙」も「ポスト」も目立った傾向は見られなかった。テーマの重複が顕在化しなかったのは、テーマと「政治漫画」とが一对一に対応したものがほとんどであったことだけでなく、重複されたテーマがすべて「文化」と「政治」の組合せであり、「文化」テーマが主テーマの「政治」の理解を補完する働きしかなかったことによるものである。たとえば、「毎日」では七枚の「政治」を主テーマにした「政治漫画」のうち五枚が「文化」との組合せであり、「政治」の常識(共通の了解事項)で想起されたテーマをもう少し鮮明にする作用を狙っていた。これに対して、「ポスト」では、テーマと文化による示唆だけでなく、他の技法でも作品を際立たせようとした。このように細部には違いはあるものの、「三紙」と「ポスト」との間には「文化」的要素に依存して「政治」の常識を想起

させようとする試みにおいては共通であり、いいかえれば、読者の認知を「政治」に固定化させることを狙ったとみることができる。

② シンボルの分析

「政治漫画」のテーマをどのような事物で象徴化しているのかをみると、「三紙」では日用品や機械などが多く生物も同じくらい多い(表3)。これら二つの項目を合わせると半数近くにもなる。このなかで政治現象を直接イメージさせるもの(選挙演説用自動車、だるまなど)は比較的少なく、専ら擬人化によって政治現象を読み手に想起させようとしている。たとえば、国会議事堂に手足をつけたり、欠伸をさせたりするものから、牛の顔に田辺社会党委員長の顔をつけたものまでさまざまではある。また、「衣装」については全部が迷彩服であった。社会党の牛歩戦術のシンボルと同様に、PKO法案のシンボルも事物が固定化している。

これにたいして、「ポスト」では、「人物」の誇張にシンボライズさせている。これは、大統領選挙に関するテーマの多さがここに反映しているとみることができる。つまり、大統領選挙候補者の性格(パーソナリティ)を描こうとしたことと大統領の政策を彼の登場によって明らかにするというねらいがあったように思われる。

シンボル化される人物の数をみると、いずれの「政治漫画」も登場人物数が一人から三人までが多い(一人もいない場合も含めると、約六割にものぼる)。従来から指摘されてきた「見かけの情報容量」とほぼ一致する。「政治漫画」のコマ数の制約、政治現象という舞台の登場人物、シナリオの性格、などが情報容量の固定化に大きな影響を与えている。政治の舞台での出し物の定番は、日本では「与党と野党」の対立であり、「政府」と「庶民」、「大衆」、「民衆」のやりとりであった。この定番は九二年六月の「政治漫画」にもはっきりとあらわれている。PKO法案をめぐる国会論戦、法案成立後の参院選にむけての「庶民」への態度などに象徴されている。(表4)からわかるように、内外政治家で九八・五パーセントとほぼ登場人物のすべてを網羅することから、内政・外交の「主役」は政治

家が担っている。もっとも、この時期は環境サミットや翌月のミュンヘン・サミットに関わる「政治漫画」の影響で、「三紙」の「外国首脳」の登場数が多い(二六・二パーセント)。「首相(大統領)」、「与党政治家」、「野党政治家」という項目に収斂したもうひとつの理由は、政治的行為の主体が政治家であるということが暗黙の前提になっていることと、政党の党首が無条件に政党を象徴化することがあげられる。逆にいえば、政党党首以外に政党を象徴化するものに乏しいということになる。この点は「ポスト」では異なる。共和党は象、民主党は驢馬、といったふうに人物以外にも政党をシンボル化するものが存在する。⁽¹³⁾それゆえ、象徴化されたテーマが、政党主体の問題であるのか政治家主体のそれであるのかを「ポスト」では明確に表すことができる。政治家という人物がシンボルとしてカバーする領域の違いは、「政治漫画」の読み手に対しての負担(どの程度政治に関する知識を常識としていいのかという点)の違いになる。したがって、この点からみれば、「政治漫画」の読者層の尖鋭化が「三紙」のほうに表れてくることになるといえる。

「政治漫画」の「文法」を探るために、「主語―述語関係」をみていく。まず、「主語」にあたる「主体」については、「三紙」では「首相」、「政治家」、「外国人」の順に頻度が大きい(表5)。そしてこの三項目だけで八五・三パーセントにもなる。さらに、「庶民」と「女性」をふくめると九〇・七パーセントの高率であり、「政治漫画」の人物中心傾向がここでもはつきりと表れている。「庶民」と「女性」(ともに二・七パーセントしかない)の頻度の低さは、次のように説明することができる。「庶民」は政治現象の批判の主体であり政治現象そのものの「主体」ではないとみなされている。「静かなる傍観者(観察者)」であって、自らの姿勢は明確には表現されない。「女性」は「社会」現象では「社会風刺画」の「主体」として描かれることもあるが、「政治漫画」においてはトピックス的な事象でないと描かれることはまれである。⁽¹⁴⁾

「ポスト」の「主体」で特徴的なのは、モノが「主体」となることが多いことである(三六・八パーセント)。「物

質」、「政治家」、「大統領」の順番であるが、分布の様相は偏りが「三紙」に比べてない。「物質」の内容を細かくみてみると、自然（森林の伐採）、建物（煙で大気汚染を促進させている工場）、組織・集団（省庁、議会）など擬人化までには至らないが悪い意味での人間性が感じられる内容である。「ポスト」の「政治漫画」の「主体」でもうひとつ特記すべきことは、「庶民」の描かれ方である。「三紙」ような「静かなる傍観者」ではなく、批判すべき行為をする対象として描かれている。立候補表明をせず、争点や政策についてどのような立場をとるのか明らかでないペロー氏（候補）に熱狂的な対応をする民衆の姿を「風刺」している「政治漫画」がある。権力批判のための「良識の権化」としての民衆像に陥るのを避けている。あくまで、柔軟な姿勢で対象化を試みている。選挙が「イメージ選挙」と呼ばれ、政治参加のあるべき姿からは乖離しているという批判は日本においても当然なされている。しかし、主権者である民衆の責任を「政治漫画」が問い掛けるケースはほとんどみられない。絶対的な批判主体という「民衆」の地位・役割を日本の「政治漫画」も見なおす時期にきているのではないだろうか。⁽¹⁵⁾

「述語」に相当する部分は「客体」と「述語動詞」からなる。「客体」については、「三紙」においては「その他」は別にして比較的一様である。「外国人」が多いのは、国際会議の開催のためである（表6）。国際関係のなかの日本政治を表す「政治漫画」の設定が多いことがあげられる。国内の政治状況を観衆として見物しているのは、「庶民」ではなく「海外の人々」なのである。内政の影響が海外にまで及んでいる反面、「庶民」が受け手として登場する機会が少ないところに加えて傍観者すらたりえない「庶民」像があるとすれば、政治が「庶民」からますます乖離していくことを「政治漫画」は示唆しているといえる。（表6）から明らかかなように、「読売」の「その他」項目は「読売」の「客体」総数の七六・五パーセントにも及ぶ。これは、「読売」の「客体」の種類が多様であっただけでなく、人物が外国人政治家以外の人物が多かったことや、生き物がそれに次いで多いことがあげられる。「ポスト」は「政党」、「庶民」が多く、「三紙」にくらべて「政治」の享受者としての「庶民」像がある程度持ち、批判対象としての姿と合わせ

て考えるならば、「庶民」を必要以上に理想的な存在とみなさず、他の対象（為政者、組織、体制、制度など）と同様に相対的な視点で捉えているといえる。

「述語動詞」については、「三紙」では「積極的行為」が全体の三〇・四パーセントに達し、以下「消極的行為」（無視、遅滞、浮遊など）、「意外な結果」（起承転結の転を生ずる行為）、「感情の表出」と続く（表7）。ここにおいても「読売」が著しい傾向を示している。「感情の表出」となる行為が「朝日」と「毎日」にくらべてきわだって多い。元来、「政治漫画」の特徴のひとつとして「含み」と呼べるはたらきがあることは経験的に知られている。対象を直接攻撃せず、攻撃の意味・意義を伏せたり、媒介物をおいてそれへの攻撃を通じて本来の対象を「笑う」ことがそれである。言いかえれば「風刺」には直接の感情の表出はそぐわない。もつとも感情ムキ出しの対象を嘲笑することはありうる。「読売」の事例も半数はそうだが、文字情報（見出し、画像説明文字など）との相互作用により対象への直接的な感情が表れているものがある。また、「意外な結果の招来」では、「政治漫画」のレトリックである対比・対照の技法を表出させる基礎となっている。「ポスト」の「政治漫画」についても「三紙」とほぼ同様の傾向がみられる。

「主体」、「客体」、「述語動詞」の相互関係を形態的にみたのが（表8）の表現形式上の特徴である。日本の「三紙」では、描かれている物の「配置」にもつとも神経を払い、次いで画像内における「動き」、「大きさ」、「線・形態」と続くが、各々「配置」の約半分である。これにたいして、「ポスト」では、色調や明暗を重視し、「線・形態」、そして、人物を「戯画」化するための「身体（誇張）」が多い点の特徴として見いだせる。「対比・対照」を生み出す表現技巧が日本と合衆国では異なっていることがわかる。

③ 活字情報との関連

「政治漫画」内の見出しや「フキ出し」、および説明語句は、画像と補充関係にあることが経験的に知られているが、描き手の意図に反して画像を凌駕することがある（表9、表10）。なお（表9）、（表10）ともに「政治漫画」内文

字情報からみた関係である。

(表9) からわかるように、「政治漫画」全体としては、「劣位」と「中位」で七〇・八パーセントになり、画像の補完という役割を文字情報は越えていないことが明らかである。新聞別にみると、「朝日」にこの補完傾向は強い。八六・二パーセントをこの二項目で占めている。画像内のシンボルが安定した対応をしている(「ヘルメット」「迷彩服」
 ⅡPKO、「宮沢・大内・石田」Ⅱ自公民PKO支持協力、など)ことが補完傾向の強さを裏付けている。一般に人物シンボルは、使用頻度が高くなりすぎると文字情報に依存せざるを得なくなる。というのは、たとえば宮沢首相は政府を代表すると同時に与党自民党を代表し、かつ政府における政策そのものやそれに付随する内外の諸問題をも象徴化する。それゆえ、あまりに頻繁に宮沢首相が登場すると、読み手にとってはそれだけではどのテーマについて「政治漫画」が描かれているのかがわからなくなってしまう。このため、文字情報に頼るようになる。これに対して、UNTAC(国連カンボジア暫定統治機構)の明石代表はカンボジアPKO以外に登場することのきわめて少ない人物である。このような人物がシンボルとして登場すれば、読み手は文字情報にそれほど依存することなく「政治漫画」のテーマを理解しやすい。

「ポスト」の場合、とりたてて文字情報優位の傾向はみられない。しかし、全般的な傾向としては、文字情報の画像にたいする補完性を見ることができ。若干「優位」項目の頻度が大きいのは、前述したシンボルの使用過多状況が日本の「三紙」に比べて多くみられることによるものと思われる。

次に「政治漫画」内情報が画像に内在する主張や意見にまでどの程度影響を及ぼしているのかをみてみよう。(表10)によれば、画像内の事実を解説するにとどまる「政治漫画」は約四〇パーセントあり、事実をまず伝えようとすることがわかる。個々の新聞別にみると、「朝日」では「事実暴露」にまで関与する文字情報が一割にも満たないことが特徴としてうかがえる。このように、「政治漫画」の画像に内在する主義・主張にまで文字情報が影響を及ぼしていない

のは、「朝日」においては、内在する「論理」は文字でなく画像で、と読み手に判断を預けていることになる。「事実暴露」に関しては、「読売」が最も高く(三七・五パーセント)、次いで「ポスト」の三五パーセントとなる。

最後に、「政治漫画」の表している立場を外的な文字情報とテーマにたいして評定した。(表11)をみると、テーマにたいして非好意的、つまり批判的な態度を表明する「政治漫画」が全体としては五一・八パーセントにとどまったところが、各新聞ごとに見ると、「ポスト」(八〇パーセント)、「毎日」(七五パーセント)、「朝日」(五五・二パーセント)の順でテーマへの非好意性が高いといった結果を得た。政治批判の手段としての「政治漫画」の特徴がまだ失われてはいないことを示すものである。ことに「ポスト」において高い割合を示した(「三紙」全体では四五パーセントと日本の「政治漫画」は約半分に落ちる)のは、「政治漫画」の新聞上での存在証明がまだはつきりしていることと、政治批判の確かな手段であるという認識が社会的に得られていること、の二つを原因としてあげることができる。

「朝日」や「毎日」が「ポスト」に比べ「政治批判率」が低いのは、「不偏不党」や「客観報道」の姿勢とそれを支える構造的背景から日本の「政治漫画」が必ずしも自由ではないことをも示している。また、「読売」のように「好意」が少し上回りつつも全般的に平板な結果を得たことについては、「適正」な客観的立場をふまえつつも「独自の」立場を主張する組織の姿勢が「政治漫画」にも反映されているとみることができる。とすればこれもまた、「政治漫画」の「存在被拘束性」を暗示しているといえる。

(表11)はテーマにたいしての「記事」と「社説」の態度を示している。テーマに対する「政治漫画」の態度と比べると「政治漫画」、「記事」、「社説」の相互の関係をみるることができる。「記事」については、テーマに対して事実関係を表記した「中立」的態度が九〇パーセント近くあり、日米の新聞ともに差違は見られない。この点は「政治」記事という記事の性格(偏りを極力避ける)に負うところがとくに日本の新聞では大きい。「社説」とテーマとの関係については、テーマに関して「非好意的」(批判的)な態度をとる社説が多い。「読売」が少々他と異なっているのは、

六月前半のPKO審議について「朝日」や「毎日」とは異なった態度をとったためである。「ポスト」もほぼ批判と「中立」・「好意」が半々であった。

ではどのようなテーマにおいて「政治漫画」と「記事」・「社説」がどういった関連をもっているのだろうか。「三紙」については、PKO法案成立をめぐる「政治漫画」が最も多いので、「PKO」をテーマにした「社説」をみると、「朝日」六枚、「毎日」七枚、「読売」一〇枚、計三三枚ある。「PKO」関連の「政治漫画」は「朝日」一三枚、「毎日」四枚、「読売」一四枚、計三一枚六月に表れている。ここでは、「政治漫画」と「社説」との対応の仕方を次のように規定した。「政治漫画」の制作に影響を与える点を考慮して、「政治漫画」の掲載される日を含み、その日以前の日付の「社説」が当該「政治漫画」に対応するものとみなした。⁽¹⁸⁾「PKO」テーマをさらに四つの小テーマ（「PKO」そのものの、「牛歩戦術」、「三党合意」、「議員辞職」）に分けてそれぞれの対応をみた。「PKO」そのものと「三党合意」は、政府・与党の対応への評価であり、「牛歩戦術」、「議員辞職」は、野党・社会党⁽¹⁹⁾の対応への評価と分けることができる。

まず、政府の所作への評価をみると、「朝日」は国会運営の模様を描くことに終始し、PKOそのものへの批判をしてはいない。「政治漫画」と同様「社説」でもこの姿勢は変わらない。「毎日」は「政治漫画」では「朝日」と同じように国会運営への批判を見せているが、「社説」ではPKOそのものへの批判が存在した。ここから、「政治漫画」は「社説」と対立する関係はみられず、「社説」の態度に規定され迎合する傾向がみられた。「読売」では、PKOに対して「政治漫画」は六枚中三枚「好意的」な評価を下していた。「社説」はこのテーマに関して三枚ありすべて「好意的」であった。「朝日」や「毎日」と一見対照的にみえるが、「社説」にたいして迎合・包摂関係にあることは共通の特徴としてみることができるといえる。

次に野党（社会党）の対応への評価をみる。どの新聞も程度の差こそあれ「社会党批判」の色彩を帯び、「社説」に

追従する形で「政治漫画」が登場している。「朝日」は「牛歩戦術」、「議員辞職」に関する「政治漫画」はそれぞれ二枚ずつあり、いずれも批判的な態度を示していた。「社説」は「議員辞職」に関するものが一枚あり批判的内容であった。「毎日」は「政治漫画」ではこの項目は一枚しか扱っていない。また、「社説」も言明を避けている。この点から「朝日」と「毎日」の政治的態度の一端がみえる。「読売」では、「牛歩戦術」について「政治漫画」三枚、「社説」二枚、「議員辞職」では双方四枚ずつですべて批判的態度を示していた。この点から「読売」の政治的態度をうかがい知ることができる。また、「毎日」、「朝日」、「読売」の順に社会党批判がゆるやかであった。この場合においても「社説」に対立する「政治漫画」は見られず、「社説」の立場を踏襲するにとどまっている。

「ポスト」については、ブッシュ大統領および彼の政策と議会などの「政治漫画」が五枚あり、「地球サミット」(での大統領の姿勢)、「修正予算案」に関して描かれている。この「政治漫画」に対応して「社説」がそれぞれ五枚存在し、すべてブッシュ大統領の政策への批判となっている。たとえば、ブッシュ大統領が環境問題を省みない修正予算案を支持したことを描く「政治漫画」(九二年六月九日付)が掲載されると、それに先んじて前々日に、ブッシュ大統領の環境政策は、リオ・デ・ジャネイロの地球サミットでの提言同様芳しくない」と批判(六月七日付)し、さらに六月八日には、修正案支持をひっこめるよう示唆する「社説」を載せている。また、六月一四日の「政治漫画」ではほうほうの体でサミットから逃げ出すブッシュ大統領を描くと、一日の「社説」で下院へ修正予算案への反対の意思表示をするようにとしきりに促し、一四付では、富裕国の利害のみに終始したので地球サミットでの国際的な規模の環境政策は親展しなかったと嘆いている。このように、「ポスト」においても「三紙」と同様、「社説」の態度に同調して「政治漫画」の態度が決められていることがわかる。

第三章 おわりに

「政治漫画」の特徴を日本とアメリカ合衆国の新聞の「政治漫画」を比較することによって検討した。テーマでは、テーマの重複について文化に依存することがあり、シンボルについては、「主体」に女性が登場することが少なく、ある意味で女性軽視の傾向が見られたこと、「述語動詞」には含みをもたせる表現が多用されていること、があげられ、活字情報との関連では、「政治漫画」内情報は画像を補完し「政治漫画」外情報は逆に画像（性格には画像と内的文字情報のセット）を追従させる関係にあること、がそれぞれ共通点として見いだされた。相違点については、「政治漫画」と「社会風刺画」との分業が日本では進行していること、「庶民」の描写、政治批判としての立場の明確さにおいてアメリカの「政治漫画」は拘束から自由であること、などが明らかになった。今後の展開として以下の三点をあげることができる。

第一に、長期的研究を設定する必要がある。視覚メディアがマス・メディア研究のなかでもつ位置付けをあきらかにするために、たとえばガープナー等の「涵養効果研究」や「文化指標研究」の知見をもとに信念・価値体系への研究に關与していくことが求められる。

第二に、文化研究の展開から、異文化接触、統合と支配への政治権力論への拡大へとすすめていくことも可能であろう。ステレオタイプの分析が手がかかりになると思われる。

第三に、「政治漫画」それ自体に内在する「笑い」の問題がある。「コミック」との比較を足がかりに、(非)言語コミュニケーションとしての「笑い」との比較を行なうところから体制の安全弁を超えた新しい役割を「政治漫画」に持たせることができるだろう。

第一章

- (1) 早川善治郎『概説マス・コミュニケーション論I』(学文社、一九九三年)九頁。
- (2) 「内容分析」研究に「J. B. Berelson, *Content Analysis in Communications Research*, 1952, O. R. Holsti, *Content Analysis for the Social Sciences and Humanities*, 1962, を参照。
- (3) 映像論、図像学の立場からテレビ放送、映画の分析は少しずつなされてきている。
- (4) Scott Long, 'Preface', in C. Brooks, *Best Editorial Cartoons of the Year*, 1972

第二章

- (1) 重複のもつ重要性については、拙稿「選挙と『政治漫画』——研究動向・内容分析——」(『選挙研究』第五号、一九九〇年)参照。
- (2) 被験者五名に八九枚の「政治漫画」を見せ、その中の人物に対して名前を記入させた。
- (3) この「主一述」関係の枠組みは国文法(口語)に依拠している。
- (4) 表現技巧が相互作用と関連があることは経験的にも知られている。
- (5) むろん、技巧間の相互作用についても考察する必要があるが、今回は省略した。
- (6) 評定者は前述の被験者とは異なる五人を選んだ。
- (7) M. Medhurst, & M. Desousa, "Political Cartoons as Rhetorical Form: A Taxonomy of Graphic Discourse", *Communication Monographs*, 48, (1981), 197-236, を参考にした。
- (8) 「朝日」には「社会戯評」(横山泰三)(一九二一年二月まで)、「読売」には「岡本敏の世相寸評」(毎週土曜日掲載)がそれぞれ掲載されている。
- (9) 「政治漫画」と「社会風刺画」との内容の相違については、拙稿「新聞漫画にみる政治と社会——1992年6・7月を中心として——」(関東社会学会『年報社会学論集』第六号、一九九三年)を参照のこと。
- (10) テーマの一点集中か総花式かの是非は一概には確定できない。
- (11) 九二年当時、なお、以下人物の役職、所属および政党名は九二年六月時点のものである。「与党」は自由民主党であり、「野党」はそれ以外の政党、をさす。

- (12) 現在（一九三三年九月）では、自民党が下野し連立政権が「与党」となっている。
- (13) この政党シンボルすらも「政治漫画」の硬化化を招く原因であるという指摘もある。W. Langefeld, "Political Cartoons as Medium of Political Communication", *International Journal of Political Education*, 4, (1981), 343-372. #67 「政党シンボル」は Guy W. William Crotty ed. *The Party Symbol*, (W. H. Freeman and Company, 1980) を参照。
- (14) 「政治漫画」に描かれる「女性」については、性差やステレオタイプの問題として扱われている。K. Meyer, J. Seidler, T. Curry, and A. Aveni, "Women in July Fourth Cartoons: A 100-Year Look", *Journal of Communication*, Winter, (1980), 21-30. #67 「政治漫画」ではないがメディアのなかの女性像を扱った最近の研究として、諸星素樹「雑誌文化の中の女性学」（明石書店、一九九三年）がある。
- (15) 批判者としての庶民像の見直しは慎重を要する。庶民を批判したり嘲笑したりすることが彼らの相対化でなく、既存の強者の正当化（愚民観の徹底）を招くおそれがある。「笑い」の面では既に八〇年代から、観客や社会的弱者をあざけり笑うことが「笑い」として認知されかかっている。
- (16) 対比・対照の技法は、動作による組合せだけでなく、状態の表現においても可能である。
- (17) 漫画家のレギュラー化が新聞社（特に文化部）との親密な接触を生む。そうすると、漫画家が価値自由を保つには過大なエネルギーを必要とする。「毎日が締切」状況の悲惨さについては、長谷川町子「サザエさんうちあけ話」（姉妹社、一九七九年）が詳しい。また、連載漫画家の「出版社困い込み」状況については、「近頃マンガがつまらない」（SPA 8/11・18、一九九三年）二〇頁—二九頁、を参照。
- (18) そのため、「毎日」の社説に対応を考察できるのは四枚だけになった。PKO関連の社説が六月一五日の法案成立以後も続けて掲載されるのはジャーナリズムの本来あるべき姿だが、これが特異に見えてしまうところに、問題がある。
- (19) 「議員辞職願」を提出したのは衆院の社会党議員だけではない。社会民主連合の議員もそのなかに含まれている。しかし、「政治漫画」をはじめとしてメディアは「社会党の失点」として神話の形成に関与した。

*本論文の作成にあたり、「平成四年度北陸大学特別研究助成」の研究助成を得た。

計	WP	読売	毎日	朝日	
60	13	18	7	22	政治
4	1	3	0	0	外交
2	0	2	0	0	経済
1	1	0	0	0	労働
18	1	9	1	7	世界
0	0	0	0	0	文化
3	3	0	0	0	社会
0	0	0	0	0	スポーツ
1	1	0	0	0	その他
89	20	32	8	29	計

(表1) 「政治漫画」におけるテーマ

WPはワシントン・ポスト

計	WP	読売	毎日	朝日	
6	1	4	1	0	政党
8	6	0	1	1	選挙
30	1	12	4	13	議会
3	0	1	0	2	内閣
6	3	1	0	3	政策
7	2	0	1	3	その他
60	13	18	8	22	計

（表2）「政治」細目

計	WP	読売	毎日	朝日	
11	7	3	1	0	0人
35	9	16	2	8	1人
16	2	6	1	7	2人
11	1	4	1	5	3人
16	1	3	3	9	以上4人
89	20	32	8	29	計

（表4-1）認知できる人物数

計	WP	読売	毎日	朝日	
23	5	11	1	6	無機物
18	9	3	0	6	身体
22	3	10	1	8	生物
2	0	0	2	0	スポーツ
4	0	2	0	2	自然
2	0	0	0	2	芸術
8	0	3	3	2	衣服
4	0	2	0	2	飲食物
6	3	1	1	1	建造物
89	20	32	8	9	計

(表3) シンボル化された事物

計	WP	読売	毎日	朝日	
43	7	16	4	16	大統領 首相
82	14	2	6	18	政治家 与党
		18	12	12	政治家 野党
35	1	20	0	14	外国人
2	0	2	0	0	その他
4	22	58	22	50	計

(表4-2) 人物像

計	WP	読売	毎日	朝日	
30	4	10	4	12	首相大統領
27	5	5	3	14	政治家
17	1	10	0	6	外国人
4	2	0	0	2	庶民
2	0	0	0	2	女性
9	7	0	1	1	物質
5	0	3	0	2	その他
94	19	28	8	39	計

（表5）「政治漫画」の「主体」

計	WP	読売	毎日	朝日	首相大統領
7	2	1	0	4	外国人
9	0	5	0	4	選挙
2	0	0	0	2	食物
3	0	1	0	2	政治
11	4	1	4	2	庶民
4	4	0	0	0	その他
36	4	26	3	3	計
72	14	34	7	17	

（表6）「政治漫画」の「客体」

計	WP	読売	毎日	朝日	
28	7	12	3	6	積極的行為
17	5	4	2	6	消極的行為
6	0	1	1	4	外の作用
15	4	2	2	7	意外な結果
11	2	4	0	5	視覚的行為
12	2	9	0	1	感情の表出
89	0	32	8	29	計

(表7) 「述部」の分類

計	WP	読売	毎日	朝日	
38	14	16	0	8	線・形態
27	12	6	1	8	身体の誇張
63	10	22	5	26	配 置
34	8	6	5	15	大 き さ
38	8	14	1	15	動 き
200	52	64	12	72	計

(表8) 表現形式

計	WP	読売	毎日	朝日	
26	8	11	3	4	優位
29	7	10	2	10	中立
34	5	11	3	15	劣位
89	20	32	8	29	計

（表9）画像と文字情報（その1）

計	WP	読売	毎日	朝日	
34	5	11	3	15	解説
32	8	9	3	12	説明
23	7	12	2	2	暴露
89	20	32	8	29	計

（表10）画像と文字情報（その2）

(表11) 「政治漫画」の立場

計	WP	読売	毎日	朝日		
15	1	13	0	1	好意	テーマ
27	3	10	2	12	中立	
47	16	9	6	16	非好意	
89	20	32	8	29	計	
15	3	8	0	4	好意	社説
14	5	5	1	3	中立	
36	10	8	5	13	非好意	
65	18	21	6	20	計	
10	1	6	1	2	好意	記事
64	12	21	6	25	中立	
9	1	5	1	2	非好意	
83	14	32	8	29	計	